校長室だより

R4.6.6

６年生の修学旅行も無事行くことができました。広島での原爆資料館の展示は、この日本で悲惨な戦争があったことを伝えていました。

この上空に原子爆弾が落ちたと聞き、原爆ドームを見上げ、折れ曲がった柱を見ると、どれだけの威力だったのかと想像します。貞子さんの話を含め、心が締め付けられる思いになりました。二度と戦争はしてはいけないと心に刻みました。他ではなかなか経験できない広島に行かないと経験できない平和学習でした。

先日、児童クラブの保護者会でお話をする機会をいただきました。お話の内容は、「あったか言葉とチクチク言葉」です。約 15 年ほど前、ＮＨＫのゆうどきネットワークという番組で流された群馬県の小学校の先生の取組が、広がったものです。「いのちを大切にできる子は、言葉も大切にできる」という先生の思いから、言葉を大事にする学級経営を始めました。言われて嫌な言葉を「チクチク言葉」として紙に書き出し、封筒に入れてもう使わないように封印しました。そして、聞いてうれしくなる「あったか言葉」は、書いて壁に貼るようにしました。これら以外にも、一人一人の違いを認めるような活動なども含めて「あったかプロジェクト」として活動したことが紹介されたのです。この後、関連本が出版され、低学年の道徳で取り上げられるなどしました。最近は、「あったか言葉」を「ふわふわ言葉」とも言うようです。

テレビやゲーム、動画サイトの影響があるかもしれませんが、「きつい言葉」や「強い言葉」に慣らされて、相手の事を思いやる言葉や感謝の気持ちを表す言葉を知らないのではないかと思うことがあります。コロナ禍でますます人と接することが希薄になってきており、コミュニケーション力を育てることが難しくなっているのではないでしょうか。一人一人違いのある子どもたちの心の通じ合うことや理解し合うことを妨げてなければいいのですが。「チクチク言葉」は心に傷となって刺さります。

児童クラブでのお話は、その後、子育ての話に進みました。親が、「チクチク言葉」を使っていないでしょうか。子どもに負の影響を与えていないでしょうか。親に言われた嫌な言葉として「ばか」「役立たず」「無理だ」「知恵が足りない」「あなたにやってもらわなくていい」「お前の事なんか知らない」「出ていけ」「みっともない」「親は苦労してるのに」「妹に比べてだめだ」「お前は捨てられていた子だった」があります。ここまでは言ってないとしても、親の思う通りにいかない時、ついイラっとしてきつい言葉で叱っていませんか。これは、「チクチク言葉」と言うよりも「イライラ言葉」と言ってもいいかもしれません。「何やってるの」「早くしなさい」「うるさい」などはよく使ってしまいがちです。「教えてあげられるのは親しかいない」「子どもに有無を言わせない態度も大切だ」と考えて出た衝動的で感情的な言葉ですから、せっかくの親の愛情が、子どものトラウマになったり、自信を失わさせる原因になりかねません。「あったか言葉」を使っていれば、親に接する態度も変わってきます。親子のコミュニケーションをしっかりとっていきましょう。